



本道で淡水に眞珠養殖を試みたのは、明治37年から38年にかけて、千歳孵化場員越田徳次郎氏が千歳川産河貝によつて創められたのが最初で、このことは昨年4月号の本誌で大屋善延氏が、当時の試験報告まで紹介され、併せて本道での企業的可否が種々の点から検討、親切に記載されている。しかるに去る10月28日発行「北海タイムス」紙上には「千歳川から眞珠がとれた」という見出しで、4枚の写真まで添えてデカデカと出ておつた。養殖場所は千歳町字蘭越で、経営主体は「北海道眞珠養殖漁業生産組合」となつている。兎もあれ千歳川から眞珠の生産されることは、元より結構なことであるが、しかるに千歳川に関する眞珠について土人間の語り草のようなものが、まことしやかに出ているが、これは恐らく誰れかによつて作文されたものと思う。なんの歴史でも往々にして歪められ勝ちなので正確なものが出来ない。日本の歴史でさえ兎角の評があるから無理もないが、新聞に出ておつた眞珠のことは極めて近代のことである。しかも内容は嘗て自分が話したことが随分誤り伝わつたように思われるが、一応これを明かにしておきたい。

新聞には明治37年アイヌの若者が川辺に打寄せられた死貝の中から母指頭大の眞円の眞珠を拾ひ、当時の値段で片山

元男爵が六千円で買取つた。現在の相場なら九十万円と見積られているエピソードがいまも現地民の語り草に残つている云々とある。

ところで明治37年といえば前記のごとく、千歳孵化場の越田徳次郎氏が(今は故人)千歳川産河貝に眞珠形成試験を開始した年であり、アイヌの若者の眞珠を拾つたというのは誤りで、実は矢張り当時千歳孵化場員であつた波多野安吉氏(現在恵庭町に居住しておられる)が孵化場構内で偶然死貝からこの眞珠を発見したのは経約4分程のほとんど眞円で、忽ち話の種となつた。当時場員であつた片倉健吉という男爵さんがおつて(片山は誤り)しきりにその眞珠を欲しがつたというのは、その頃猫も杓子もという程ネクタイにピンを挿す流行時代であつたので、これをピンに仕立てたらドンなによいだろうかと思うのは独り本人ばかりでない。それに片倉さんは何時までも山の中におられる人でもないし、これを挿して社交界に出られたなら、さぞ話題を呼ぶだろうという想像から場員もすすめるので、遂に片倉さんはこれを引受けることになつた。このことは自分も明治42年に千歳孵化場に赴任して、当時の模様などをご兩人からよく聞かされたものであつた。

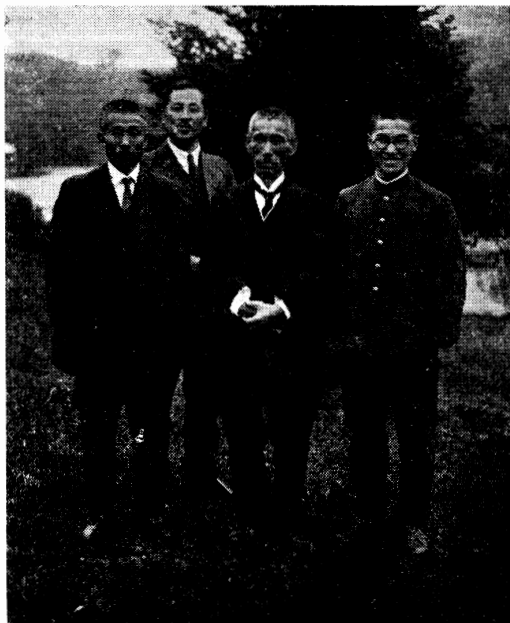
さて片倉さんもその眞珠を上京の際持

参して早速御木本真珠店に行つてネクタイピンに作つて貰うことになつたが、本職の御木本でも河貝にもかかる立派なものがあるのかなと驚かれ、もしこれが生貝から出たのだつたら千円以上の価値があるといわれた由。

いよいよピン作製の段取になつたが、斯かる大きな玉を普通のピンのように爪で簡単にもたせるわけにも行かないというのでその爪も竜の爪にし、それにはウロコまで立派についている。ところが出来上つて見たら玉と爪の重さのために(勿論金製)ネクタイに挿しても直ぐ廻つて、肝心の玉は正面を向かないという仕末、そこで御木本は小さな足を別に一本添えて廻らないようにしたもので、まことに立派なものであつた。読者はいかにこのネクタイピンの大きくかつ立派なものであるかを想像していただきたい。その後明治44年かに片倉さんは退職して郷里仙台市外白石町の自宅に帰られたが、あの年には信道という二男が生れておつた。しかるに昭和3年秋に片倉さんが突然信道さんを連れて17年振りで来遊されたが、その時写したのがこ

の写真である。この時も例の真珠のネクタイピンを持参になり、暫く振りで当時の話をしつゝ一泊されて帰られた。その後幾年か過ぎて片倉さんは他界されて今は信道さんの時代になつた。

ここでこの真珠にからまる裏話をチョット披露しておきたい。新聞には六千円に買取つたと簡単に書いてあつたが、



左から波多野安吉(真珠発見者)片倉健吉(男爵)片倉信道(令息)後は筆者

それは全然誤りで、第一片倉男爵さんの当時の俸給は35円だつたか40円で、主任でもそれより5円より高くなかつた。そしてこの真珠を譲り受けた時は差当り銘仙一反をお禮として波多野氏に渡し、同氏はまた大いに恐縮感謝してこれを受けた。当時銘仙を着るという人は俸給50円位を取る人か、高等官位

にならなければメツタに着ないという時代で、一反5、6円位であつた。しかるに片倉さんが真珠を持参して御木本で死貝からの真珠でも、250円の価があると聞かされては、当時としては大金であるが、幾らなんでも銘仙位では気の毒と、一応100円余の公債証書を波多野氏に渡して、現金は何回かのなし崩しで払つてもらつたという次第である。随て時価90

万円なぞということは話としては面白いが頗るナンセンスのものである。

以上は千歳川の真珠に関する真相であつて兎角噂は大きく拡がり易いものであるが、これに関しては時とところ、売つた人、買つた人、それを实地に見ておる人があるのに、噂のままにしておくことは歴史を正常にする所以でないし、今後ますます興るべき真珠養殖のためにも出来る限り正確ならしめることが必要と考え、過日恵庭町の波多野氏を訪ねてこの話をして歓談数刻に及んだ（同氏は今年81歳の高齢にもかかわらず非常に元気である。氏は人も知るごとく千歳孵化場に長く勤務した人で筆者とは交友46年に及んでいる）

実は物好きな自分も勤務した記念に千歳川の真珠を手に入れて何か作らんと心掛けたが、その頃土人はこれを貝玉といつて貝の卵だと思つていた。そして夏にならねば玉が出来ないよといつておつた。孵化場に働きに来る女達に聞いて見たら皆その玉を持つておるといふことで、よいのなら買つてやるから見せてくれといつたら翌日2、3人が早速持つて来たが、見れば光沢どころの騒ぎではなく、頗るキタナイものばかりで、そこで生きてい貝から取つたものをと改めて頼んでおいた。その後何十日かたつてから、よく土人相手に札幌から何かを売りに来る日本人が、旦那さんが貝玉を買うといふことを聞いたから持つて来たといふ。見れば全部生貝から取つたものだが、形がよくない。大抵お供への餅のように上が円く下が平らなものが多かつた。折角持つて来たから三個ほど買つて、その後上京した時矢張り御木本でピンを作らせて今にそれを持つている。

こういつたわけで千歳川から真珠の捕れることは疑いないが、但しこれを経営するには大屋氏のいわれるごとく慎重の要があると思う。

去る12月2日の読売新聞にも非常に

明るい見透しがあり、来年は30万個も使用し貝一個に核や細胞10宛を入れ、出来た真珠を輸出して1,500万円を獲得するとあるが成功を祈りたい。

序でにここで生物学をやる方々のご意見を聞きたいことは、夏分に河貝を採捕して置くと何時とはなしにドロドロした液を出す。自分達はそのものに対しては極めて無関心であつたが、慥か大正年間であつたが、京都大学教授で理学士川村多実二という淡水生物学の権威者が、千歳孵化場に來られた時、河貝を少し捕つて欲しいとのことで、早速土人に捕らせた。しかるにその時前記のような液を出したのを川村氏はこれは貝が稚貝を沢山に生み出したもので、顕微鏡では稚貝が盛んに動くのが見えるとのことで、早速これを顕微鏡下に見て全くその奇観に驚いた。そしてこれが生み出されるとその附近にいる魚類、主としてウグイのごときものの鰭の末端に貝の爪でしつかりと附着して、ある期間だけその行動をとつているが、その後適當のところに行けば自ら鰭から離れて河底に落ちて独立の行動を取り、成長するものであることの話聞き大いに得るところあつたが、その後川村氏の著淡水生物学（上下二編）を見てさらにこのことの認識を深めた訳である。ここにおいてつぎのことがいい得る。すなわち淡水魚類の少ないところ（ことにウグイ、鮎の類）には河貝の繁殖が少ないことになり、さらに想像を逞うすれば、これらの魚類の多く棲息しておらないところでは、河貝が自然に繁殖する望みが薄いだらうということが考えられる。寄生したりされたりすることによつて生活相助の關係がある動物もかなりあるが、この河貝とウグイなどの場合、如何なる因果關係あり哉の研究を聞きたい。これによつて河貝真珠養殖の前途に光明を与えることになる哉も知れないからである。

（元企画課勤務）